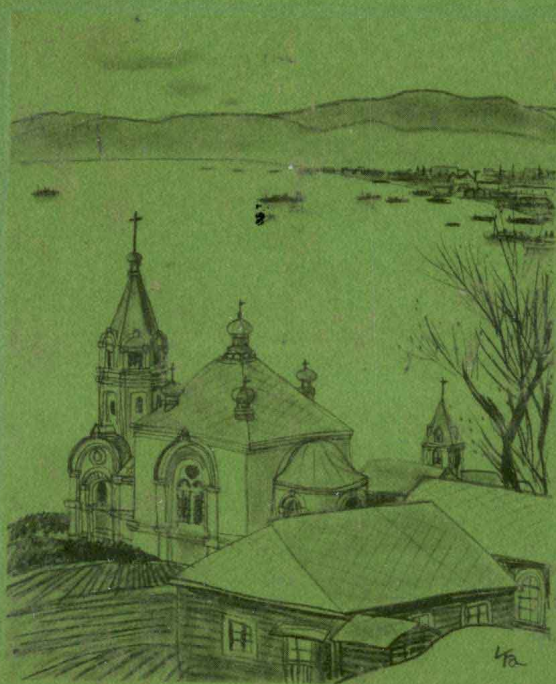




五木寛之

青春の門

放浪篇
上

講談社

青春の門 第三部 放浪篇 上

著 者 五木寛之

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二
〒一一二 振替 東京 三九三〇
電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

第一刷発行 昭和四十八年九月二十四日
第十二刷発行 昭和五十一年四月 十日



©五木寛之 昭和四十八年 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価は箱に表示してあります。(文2)

Printed in Japan

目次

夜の船室にて	5
新しい明日	20
鷗と圧制	34
寒い地下室で	50
乳房と怪談	62
風の夜の幻想	74
私怨の道	86
報復と抵抗	119
港の男たち	134

老アナーキストの涙

決断のとき

トラック劇団

208 173 147

表紙絵

さしえ

風間 完

題字

菅 甘林

装幀

村山豊夫

青春の門

放浪篇

上

夜の船室にて

汽笛が鳴った。腹にこたえる重い音だった。汽笛は夕暮れの棧橋に長くこだまし、暗い冬の海峡に流れて消えて行った。

きびしい、いっそ爽快なまでの寒さだった。伊吹信介は灰色のスウェーターの襟に首をうずめて、ぶるっと身震いした。彼は甲板の手すりにもたれて、少しずつ遠ざかっていこうとしている突堤と棧橋を眺めていた。連絡船は思いがけない速さで動いている。海の色は青ではなかった。むしろ黒味をおびた灰色をしていた。その灰色の海面が船腹にそって走ってゆき、白い水脈が次第に小さくなってゆく青森港へのびていた。港のむこうに青森の街の淋しい灯があった。街は暗天の下に長く無愛想にひらいた感じで横たわっている。足もとから船底で稼動している巨大な機関の震動が伝わってきた。

船出というには、どこか意気のあがらぬわびしげな背景だった。信介にはそのことが、何か良くな

い旅の前兆のような気がした。彼はスウェーターの襟の中に顎をもぐりこませるようにして再び軽い身震いをした。

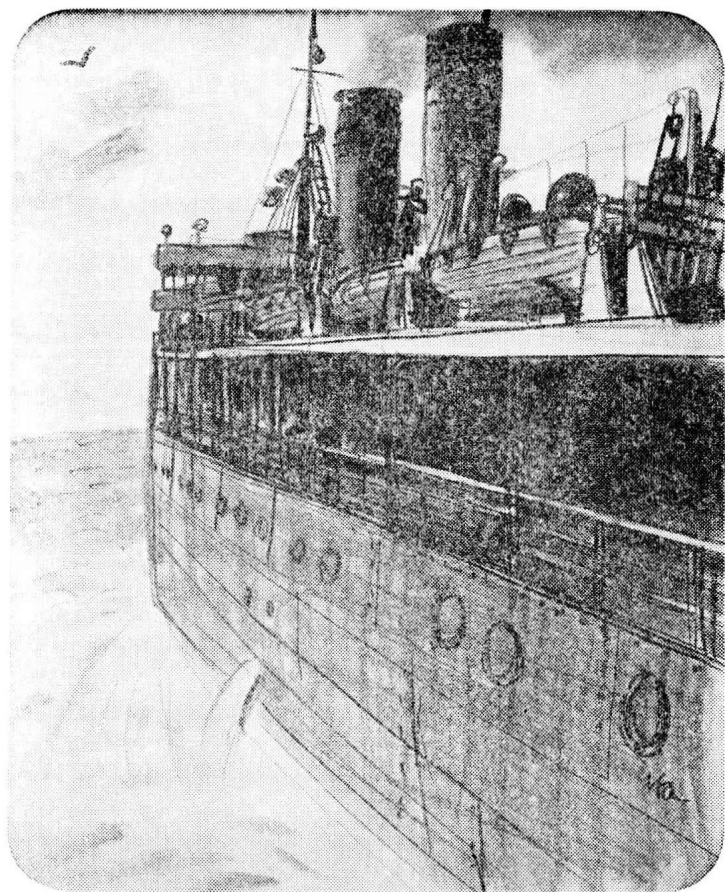
へこんどの旅は果してうまく行くだろうか？

大学を休んで緒方やその仲間たちと東京を離れることに決めたのは、あくまで信介自身の意志である。三学期を迎えぬままに大学を離れ、翌年、新学期のはじまるその時まで地方を回って、それからもう一度、新入生と一緒に一年おくれの大学生活をやり直そうと考えたのだ。しかし、気持の上で多少の迷いやためらいがなかったといえは嘘になるだろう。だが彼は緒方に一緒に行動をとることを約束し、はじめて顔を合わせた仲間たちと一緒に、去年の秋から暮れにかけて何度か小さな合同合宿生活を送ったのだった。しかしそれは、まだほんの基礎がためのテストのようなものだった。緒方の考えている本当の「演劇と生活の長征」は、冬の北海道にはじまり、次第に南下して秋には九州に及ぶという、いささか夢物語にちかい雄大なものらしい。そうして新しい年が明けたいま、緒方や信介たちの一行は、北海道へ向かう青函連絡船上にいたのである。その信介の気持のどこかに、行方不明になったままの織江のことが引かかっていたことも事実だった。

織江が札幌のどこかの酒場で働いているらしいことを、カオルは信介に教えてくれたのだ。そして偶然にも緒方のひきいる演劇グループの本格的な旅公演は、こうして北海道からはじまることになっているのである。

へもしかすると織江を見つけ出せるかもしれない

信介はそう考え、そんな自分の気持が一体どのような性質のものだろうか、頭の中をみつめるよ



うな感じで目をつぶった。

男の女に対する愛、といった感情でもないと思う。勿論それはあるだろう。そして事実、信介と織江の間には、男と女の関係があったのだ。織江は彼を男として好きだということを、はっきり態度で示していた。だが、信介の彼女に対する気持は、ただそれだけのものではなかった。それは友情とも、幼い頃からの仲間に対する懐しさとも、また、兄妹のような感情ともいえる、一種独特の感覚なのだ。

信介は寒気に凍てつきそうなまつ毛を指でこすって、暗い海峡のむこうの未知の街のことを、そしてそこで生きている織江のことを考えた。

「おい、どうした伊吹」

海をみつめて考えにふけている信介の肩を、誰かの手が軽く叩いた。ふり返ると、緒方が長髪を風になびかせて立っていた。彼は厚手のビロード地で作った茶色のルバシカを着、鼻の下にひげを生やしている。その風貌は何かの雑誌で見た「若き日のゴードリキイ」の写真に似ていると信介は思った。そんな恰好が緒方には良く似合うのである。

「ちょっと考えごとをしてたんです」

信介はふり返ると、手すりに背中をもたせかけ、緒方の顔を眺めながら言った。

「緒方さんの誘いに乗ったばかりに、とうとうこんな所まできてしまった」

「まるで人さらいにさらわれたサーカスの子供みたいなことを言うじゃないか」

緒方は苦笑して人差し指を信介につきつけると、

「そろそろミーティングをやるぞ。おくれないように参加してくれ」

「わかりました」

緒方はポケットから煙草をとり出し、風に吹き消されないように苦心しながらマッチで火をつけた。白い煙が海へ飛んでいった。

「いよいよ海を越えるんだな。これから日本本土と訣別して、われわれの最初の旅がはじまる。これはおれ自身にとっても、記念すべき旅になるだろう。歯を食いしばってもがんばらなくてはならん」緒方は大きく背伸びをすると、自分に言いきかせるように呟いた。

「北の海をぼくははじめて見ましたよ」

と、信介がふり返って言った。「どこかに妙な凄味がある。なにか兇暴な意志とか、盲目的な激情とか、そんなものを感じさせる海の色ですね」

「風があるのが気になるな。揺れかたが激しいと酔っちまいそうだ」

「船室へ降りましょうか」

「そうしよう」

信介は緒方と並んで、船底への急な階段を降りて行った。そこには今度の旅公演の仲間である、十一人のメンバーが待っているはずだった。

船室は連絡船の船底に近い部分に作られているらしかった。大きな風呂敷包みを枕に寝転がっている客や、家族で輪になって弁当をひろげている客たちが、広間のような天井の低い船室に雑然と散ら

ばっていた。空気は濁って、独特の臭気が漂っている。客室というより、収容所の中といった感じがした。

信介はそんな船室の雰囲気嫌いでなかった。むしろ何となく懐しささえ感じるのである。そこで話されている言葉には、強い東北の訛りがあって、九州育ちの信介には意味のわからない部分も少なくなかった。だが、その船室には、どこか筑豊のヤマの生活を偲しのばせるような、一種のいきいきした陽気さと、猥雑さが立ちこめていて、それが信介を何となくほっとさせるのだ。

その船室の壁際の隅に、若い男や女が十数人、ひとかたまりになって坐っていた。緒方と信介の姿を見ると、その中の一人が手をあげて合図をした。白い歯並みとまっすぐ左右へのびた黒い眉が目立つ、引き緊った顔立ちの青年だった。彼は大学の演劇グループの中では、かなり知られた演技者で、那智章という仏文の学生である。緒方の呼びかけに最初に共鳴したのが彼で、こんどの巡回公演でも俳優グループの中心人物となるはずの学生だった。

「おそいぞ、マネジャー」

と、那智は笑いながら信介に言った。信介はまだマネジャーと呼ばれることに慣れていなかったの
で、誰のことだろうと一瞬げんそうな顔になったが、やがてそれが自分のことだと気づくと、何となくあいまいに頭をかいて彼の隣りに腰をおろした。

「さて、それではミーティングを始めるか」

緒方は煙草を灰皿にもみ消すと、彼を囲んだ仲間たちの顔を見回して口をきった。

「上野駅を出て、この船に乗るまでは、ひょっとすると途中で脱落者が出るかもしれんと思っていた

んだが——」

と、彼は言った。

「さいわいに全員こうして本土を離れることになった。こんどのおれたちの旅は、学内だけではなく、学生演劇関係や文化運動サークル全体から広く注目されている。これはうめばれじゃない。あらかじめ作られたものを大衆の中へ一方的に降ろして行くというのが、これまでの演劇のやり方だった。ところが、おれたちは、この旅の中から何かを創り出し、そいつを持って東京へ帰ろうと考えている。その画期的な演劇的長征の第一歩が、われわれのこの企てなんだ。働きながら生活する。生活しながら公演する。実のところ、おれたちの資金はほとんど片道の旅費しかない。まず稼ぐことから始めなければならぬのだ。ここにいる大部分が、これまで親の仕送りを受けて芝居をやってきた生活を、まったく一新することになる。果して何かを産み出して東京に帰れるかどうか、それはまだわからぬ。下手をすると集団ルンペンか文化乞食になりさがって逃げ出すことになるかもしれない。だが、きみたちは、このぼくの考えに共鳴して上野駅から鈍行列車に乗り、いまこうして青函連絡船で津軽海峡をこえている。この初心を失わずに、団結して春まで生き抜こう、というのが、まずおれの挨拶というわけだ」

緒方は額にかかる髪を手でかきあげながら、一語一語を噛みしめるような口調で喋った。彼はできるだけ美辞麗句を連ねず、率直な自分の言葉で喋ろうととめているように見えた。そのせいか彼の大上段にふりかぶった演説も、それほど青臭い理屈のようにはきこえなかった。それは緒方の、一種の人徳のようなものなのかもしれない。グループの若者たちは、それぞれ膝をかかえたり、貧乏ゆす

りをしたりしながら、彼のスピーチを聞いていた。

「ところで、例の劇団の名称だがね——」

と、緒方はみんなを眺め回して言った。

「これまでずっと決まらずにきたんだが、ひとつ今夜そいつを決定してしまおうじゃないか。どうだいい」

「名前はあったほうがいいな」

と、那智がよく響くバリトンの大声で言った。「おれはもう考えてるのがひとつあるんだ」

「こっちにもあるぞ」

と、緒方が言った。

「ほかにも誰か考えている名前があったら言ってくれ。全員で自由に討論しようじゃないか。ちょっと船が揺れ出したようだから、何か夢中になって議論でもしていないと酔いそうだ」

みんなが笑った。丸顔の小柄な娘が手をあげて発言を求めた。おかっぱの男の子のような少女だった。島京子という名前の演劇科の一年生である。

「劇団ユダ、というのはどう？」

「ユダ、だって？」

「おかしいかしら」

「どういう意味かね」

緒方がきいた。島京子はちょっと照れたように首をすくめて、

「全員で十三人でしょう？ それに今夜は金曜日だし——」

「なるほど。キリストの故事にのっとったわけか」

信介には十三人と金曜日が、どうしてユダにむすびつくのかわからなかった。彼はこれまで一度も聖書を読んだことはなかったし、キリスト教についての知識も、ほとんど皆無だったのである。しかし緒方がうなずいたので、何となくうしろめたい感じのまま腕組みして独り言のように呟いた。

「横文字の名前はどうかろうなあ」

「それにキリスト教の宣伝をやる劇団だと誤解されるおそれがあるんじゃないか」と、横から誰かが言った。

「そんな面（おもて）に見えるかよ、おれたちが」

もう一人がまぜっ返し、みんなが笑った。

「放浪座、というのはどうかね」

「ちよつと古風なロマンティズムが気になるな」

「じゃあ、劇団漂流ってのは？」

「悪くないが、魅力がない」

「魅力ってやつは創り出す舞台によってうまれるもんだろう」

「バルチザン・十三」

「気どりすぎるよ」

「演劇集団・ヴァナロード、は？」

「少し大上段に構えた感じで照れるね」

全員が勝手に喋り出した。信介も頭の中で何かいい名前はないかと考えたが、何も浮んでこなかった。

「伊吹くん」

と、那智章が信介に声をかけた。

「マネジャーとして、なにか名案はないかい」

「そうだなあ」

信介は首をひねって、何か言おうとした。その時とっさに出てきた言葉は、われながらおかしいものだった。

「劇団ボタ山——ってのはどう？」

と、彼は言った。みんなが一斉に笑った。信介も苦笑して頭をかいた。

「そういえば伊吹マネジャーは筑豊出身だったな」

那智章は良く通る声で喋った。

「北海道にも炭鉱は沢山あるから、案外そいつはいけるかもしれん。だが、ちょっと俗流大衆路線ふうだな」

「いまのは冗談だよ」

と、信介は手を振った。

「ふと口から出てきただけさ。那智さん、あんたの考えてた名前は？」